

クライストの Anekdote について

(その二)

工 藤 幹 巳

2. “Anekdote aus dem letzten preußischen Kriege” について

前稿にもあげた逸話集, *Sammlung von Anekdoten und Charakterzügen aus den beiden merkwürdigen Kriegen in Süd-und Nord-Deutschland in den Jahren 1805, 6 und 7* の中にこの Anekdote と似かよった内容のものが四編あることが指摘されている。¹⁾しかし、実際にクライストがそれらのうちのどれかを原本としたのか、原本としたのならそれはどれか、は判然としない。前稿における「観察者」の編集者からの反応や、クライストの書簡の中の記述のような、確たる記録は見当たらないのである。²⁾この本文の中に「フランクフルトへの旅の途中の私に、宿の主人が話してくれた」とあることのみから、クライスト自身が直接聞いた話であって何かを読んで得た話ではない、と断定することもできないであろうが、その反面、詳細な比較検討を待つまでもなく、これら四編の Anekdote とクライストのそれとの間には、質的に大きな差異があるように思われる。すなわち、両者における内容的な違い——主人公、舞台となる場所、打ち倒す敵の数、戦いの方法、そして登場人物（後者には語り手の存在も明示される）等の相異——のみならず、構成の緻密さからくる緊迫感や面白さは比較すべくもないと言えよう。前稿のように原典と目されるものとの比較検討による方法から論ずるのではなくて、このクライストの Anekdote のみに視点を置いて、そのような構成の緻密さを具体的に跡づけることが本稿の目的とするところである。

まずこの Anekdote の全文とその日本語訳とをあげることから始めよう。

ANEKDOTE AUS DEM LETZTEN PREUSSISCHEN KRIEGE

In einem bei Jena liegenden Dorf, erzählte mir, auf einer Reise nach Frankfurt, der Gastwirt, daß sich mehrere Stunden nach der Schlacht, um die Zeit, da das Dorf schon ganz von der Armee des Prinzen von Hohenlohe verlassen und von Franzosen, die es für besetzt gehalten, umringt gewesen wäre, ein einzelner preußischer Reiter darin gezeigt hätte; und versicherte mir, daß wenn alle Soldaten, die an diesem Tage mitgefochten, so tapfer gewesen wären, wie dieser, die Franzosen hätten geschlagen werden müssen, wären sie auch noch dreimal stärker gewesen, als sie in der Tat waren. Dieser Kerl, sprach der Wirt, sprengte, ganz von Staub bedeckt, vor meinen Gasthof, und rief: »Herr Wirt!« und da ich frage: was gibts? »ein Glas Branntewein!« antwortet er, indem er sein Schwert in die Scheide wirft: »mich dürstet.« Gott im Himmel! sag ich: will er machen, Freund, daß er wegekömm? Die Franzosen sind ja dicht vor dem Dorf! »Ei, was!« spricht er, indem er dem Pferde den Zügel über den Hals legt. »Ich habe den ganzen Tag nichts genossen!« Nun er ist, glaub ich, vom Satan besessen-! He! Liese! rief ich, und schaff ihm eine Flasche Danziger herbei, und sage: da! und will ihm die ganze Flasche in die Hand drücken, damit er nur reite. »Ach, was!« spricht er, indem er die Flasche wegstößt, und sich den Hut abnimmt: »wo soll ich mit dem Quark hin?« Und: »schenk er ein!« spricht er, indem er sich den Schweiß von der Stirn abtrocknet: »denn ich habe keine Zeit!« Nun er ist ein Kind des Todes, sag ich. Da! sag ich, und schenk ihm ein; da! trink er und reit er! Wohl mags ihm bekommen: »Noch eins!« spricht der Kerl; während die Schüsse schon von allen Seiten ins Dorf prasseln. Ich sage: noch eins? Plagt ihn-! »Noch eins!« spricht er, und streckt mir das Glas hin- »Und gut gemessen«, spricht er, indem er sich den Bart wischt, und sich vom Pferde herab schneuzt: »denn es wird bar bezahlt!« Ei, mein Seel, so wollt ich doch, daß ihn-! Da! sag ich, und schenk ihm noch, wie er verlangt, ein zweites, und schenk ihm, da er getrunken, noch ein drittes ein, und frage: ist er nun zufrieden? »Ach!«- schüttelt sich der Kerl. »Der Schnaps ist gut!- Na!« spricht er, und setzt sich den Hut auf: »was bin ich schuldig?« Nichts! nichts! versetzt ich. Pack er sich, ins Teufelsnamen; die Franzosen ziehen augenblicklich ins Dorf! »Na!« sagt

er, indem er in seinen Stiefel greift : »so solls ihm Gott lohnen«, und holt, aus dem Stiefel, einen Pfeifenstummel hervor, und spricht, nachdem er den Kopf ausgeblasen : »schaff er mir Feuer ! « Feuer ? sag ich : plagt ihn- ? »Feuer, ja ! « spricht er : »denn ich will mir eine Pfeife Tabak anmachen, « Ei, den Kerl reiten Legionen - ! He, Liese, ruf ich das Mädchen ! und während der Kerl sich die Pfeife stopft, schafft das Mensch ihm Feuer. »Na ! « sagt der Kerl, die Pfeife, die er sich angeschmaucht, im Maul : »nun sollen doch die Franzosen die Schwerenot kriegen ! « Und damit, indem er sich den Hut in die Augen drückt, und zum Zügel greift, wendet er das Pferd und zieht von Leder. Ein Mordkerl ! sag ich ; ein verfluchter, verwetterter Galgenstrick ! Will er sich ins Henkers Namen scheren, wo er hingehört ? Drei Chasseurs - sieht er nicht ? halten ja schon vor dem Tor ? »Ei was ! « spricht er, indem er ausspuckt ; und faßt die drei Kerls blitzend ins Auge. »Wenn ihrer zehen wären, ich fürcht mich nicht. « Und in dem Augenblick reiten auch die drei Franzosen schon ins Dorf. »Bassa Manelka ! « ruft der Kerl, und gibt seinem Pferde die Sporen und sprengt auf sie ein ; sprengt, so wahr Gott lebt, auf sie ein, und greift sie, als ob er das ganze Hohenlohische Korps hinter sich hätte, an ; dergestalt, daß, da die Chasseurs, ungewiß, ob nicht noch mehr Deutsche im Dorf sein mögen, einen Augenblick, wider ihre Gewohnheit, stutzen, er, mein Seel, ehe man noch eine Hand umkehrt, alle drei vom Sattel haut, die Pferde, die auf dem Platz herumlaufen, aufgreift, damit bei mir vorbeisprengt, und : » Bassa Teremetem ! « ruft, und : » Sieht er wohl, Herr Wirt ? « und » Adies ! « und » auf Wiedersehn ! « und : » hoho ! hoho ! hoho ! « -- So einen Kerl, sprach der Wirt, habe ich zeit meines Lebens nicht gesehen.

この前のプロイセン戦争からの逸話

イエーナ近郊のある村で、フランクフルトへの旅の途中の私に、宿の主人が話してくれたのだが、戦いの数時間後、村がホーエンローエ王子の軍にすでに完全に見捨てられ、村を占領したも同然のフランス軍に包囲されていたそんなとき、プロイセンの騎兵がたった一人であらわれた。そして、その日戦った兵士たちがみんなこの男のように勇敢だったら、フランス軍を打ち敗かしていたにちがいないし、今より三倍も強かっただろう、と私に断言するのだった。あの男は、と主人は話した、ほこりまみれになって宿の前に跳ばして来た。そして「おやじノ」と叫んだ。私が、何か？とたずねると「ブランデーを一杯ノ」と、剣を鞘におさめながら答えた。

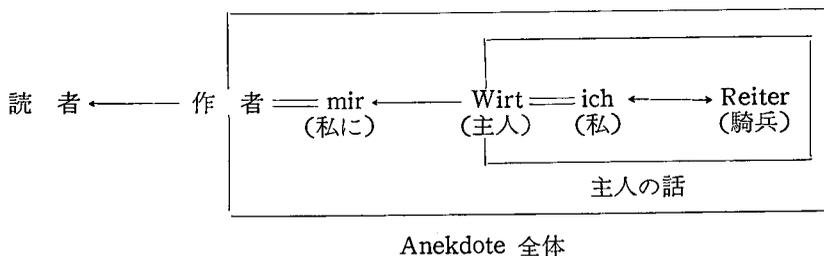
「のどがかわいてるんだ。」まさかノと私は言った、だんな逃げないんですか？フランス軍が村はずれまで来てるんですよノ「そうかいノ」と馬の首に手綱をおきながら言った。「一日中何も食ってないんだノ」悪魔にとりつかれてるんだノと私は思った。おいノリーゼノダンツィヒ産を一本持っておいで、と大声をあげ、そして、さあノと言って彼がそのまま馬に乗っていけるようにビンごと彼の手の中に押しつけてわたそうとした。「おい、どういうことだノ」と彼はビンを押しつけながら言い、帽子を取って「こんな物持って何処へ行けてんだい？」そして「ついでくれノ」と額の汗をぬぐいながら言った、「時間がないからだノ」あんた死ぬよノと私は言った。さあノと言ってついでやった、さあノ飲んで行っちゃいなノろくなことにならないよ。「もう一杯ノ」と奴は言った。銃声がすでに八方から村に聞えてくるというのに。私は言った、もう一杯？正気の沙汰じゃないノ「もう一杯ノ」と彼は言ってグラスをさし出した——「なみなみとな」と彼は髭をぬぐいながら言い、馬の上から鼻をかみ「現金で払ってやるからノ」いや、私が思ったのは、あんたを——ノさあノと私は言い、彼が望んだように二杯目をついでやった、それを飲んだのでさらに三杯目をついでやって、たずねた、これで満足したかね？「ああノと奴は身震いして「このシュナップスはうまいノ——さてノ」と言って、帽子をかぶり、「いくらだい？」いらないノいらないノと私は返事した。とっとと行ってしまいがいい、フランス人たちが今にも村に入ってくるぞノ「そうかいノ」と彼は長靴に手をつこみながら言った、「それじゃごちそうになつこうノ」そして長靴から吸いかかけのパイプを取り出し、その燃えさしを吹きとばしてから言った、「火をくれノ」火だって？と私は言う、正気の沙汰じゃないノ「そうだ、火だよノ」と彼は言う、「パイプタバコに火をつけたいからさ。」もう、軍勢に踏みつぶされてしまいがいいやノ おい、リーゼ、と私は女中を呼んだノそしてそいつがパイプにつめている間に女中は火をつけた。「さあノ」と奴はふかし始めたパイプを口に言った、「さて、フランス人どもをやっつけてやるかノ」そう言って、帽子を目深にかぶり、手綱をつかみながら、馬の向きを変えて剣を引き抜いた。すごい奴だノと私は言った、呪われたとんでもない野郎だノ自分にふさわしい地獄にでも消えるつもりなのか？三人の獵兵が——あんた見てないのか？もうすでに門の前に立ち止まっているじゃないか？「これはこれはノ」と彼は唾を吐きながら言った、そしてその三人をちらっと見やった。「奴らが10人いようと恐れやしない。」そしてその瞬間、その三人のフランス兵もすでに村に入ってきた。「パッサ・マネルカノ」³⁾と奴は叫び、馬に拍車を入れ彼らに向って突進した、真正正銘、彼らに向って突進したのだ、そしてまるでホーエンローエの全軍の援軍を受けているかのように彼らを攻撃した。そんなわけで、獵兵たちは、ドイツ兵が村にまだいるかどうか判定しかね、一瞬、慣例に反して、はっとして立ち止まった、そこで彼は手の平を返えず間もなく、その三人をみんな鞍から切り落とし、広場を走り回る馬どもを取り押えて、それらを

連れて私のそばを走り去る，そして「パッサ・テレムテーテムノ」と叫び，「良く見たかい，おやじ?」「さらばノ」「さよならノ」「ホッホーノホッホーノホッホーノ」—— あんな奴を，と主人は言った，私は生れてこの方見たことがありません。

全体の構成

Anekdote として長い部類に属するこの作品には，それにもかかわらず段落が一つもない。ということは，読者に一度も息をつがせずに一気呵成に読ませる，ということの意味するのである。しかしそれでも全体の構成は決して単純ではない。

まず語り手と聞き手という関係から全体を図式化すると次のようになる。



すなわち，勇敢な騎兵の話を主人が作者に話す，それを作者が Anekdote として読者に伝える，という二重の構造をもっているのである。主人の話の中で主人は話し手にも聞き手にもなり，作者に対しては話し手となる。作者は主人に対しては聞き手となり，読者に対しては話し手である。このような構造をもつ意味については後述するとして，さらにこの作品を話の順序にしたがって分けるなら，1. 前置き，2. 主人の話（さらに，騎兵とのディアローグ，騎兵の戦いぶり，結びの三つに分けられる）となるであろう。この順に詳細に述べることにする。

1. 前置き部分

冒頭から *als sie in der Tat waren*. までの部分であって、作者が主人から勇敢な騎兵の話聞いた、ということが設定される。セミコロンで分けられる二文から成り立つとはいえ、全体としては途中に Punkt のない一つの長文となっている。そしてこの二つの *daß* 文章は主人の話を伝える間接説話であるが、このことは後述する部分との関係から言って軽んぜられるべきではない。間接説話が用いられているということは、すなわち、まだここでは伝達者としての作者の存在が確認されることを意味するのである。

この長文は極めてクライスト的な文である。主語 (*der Gastwirt* 及び *daß* 文章内の *ein einzelner preußischer Reiter*) がすぐには出てこないこと、二重・三重の箱入り文となっている前文、先にあげたようにセミコロンの使用によって二文に分けないこと、等にそれは認められる。

題名によってプロイセン戦争中の話であること、冒頭で舞台がイエーナ近郊であることを知らされた読者にとって、*wenn alle Soldaten, ~, so tapfer gewesen wären, wie dieser* (もし兵士たちが皆この男のように勇敢であったなら) という部分は、物語に興味を呼び覚ますあの「謎解き」の「謎」に相当すると考えられる。読者にとって普仏戦争におけるイエーナの敗戦は既知の事実であるが、ドイツ人とりわけクライストの「ベルリント刊新聞」の主たる読者であるプロイセン人にとっては、痛恨の出来事であったのであるから、この叙述は、話に興味を抱かせる大きな効果をもっていると言えよう。この「謎解き」の方法もクライストに典型的な語りの方である。

2. 主人の話

A) 騎兵とのディアローグ

Dieser Kerl, sprach der Wirt, から, Und in dem Augenblick reiten auch die drei Franzosen schon ins Dorf. までの部分で、作品全体の三分

の二を占めるが、前置き部分とは対照的に、多くの短文から成っており、さまざまな特徴をもって作品全体の面白さをも支えている重要な部分である。始めの描写から見てみよう。

Dieser Kerl, sprach der Wirt, sprengte, ganz von Staub bedeckt, vor meinen Gasthof, und rief: "Herr Wirt!" und da ich frage: was gibts? "ein Glas Brantwein!" antwortet er,

ここから主人の話が始まり、それを示すのが sprach der Wirt であるが、これについては後に述べることとして、ここでは先ず時称に注目したい。騎兵が馬で跳ばしてきて、「主人ノ」と大声をあげるところまでは、sprengte, rief と過去形で書かれているが、そう叫んだとたんに現在形に変わり、主人の話が終るまで現在形のままである。その変わりようは、「主人ノ」という言葉をここでは主人自身が口にしていてもかかわらず、あたかも再び騎兵に呼びかけられて、主人が以前の状況に引き戻されたような錯覚に陥ってしまったのではないかと思わせるほどである。というよりむしろ、我々読者がそういう錯覚に、すなわち、主人と騎兵とのやりとりの場面に居合わせているかのような錯覚に陥ることを余儀なくさせられている、と言うべきなのであろう。ちょうど「ロカルノの乞食女」のあの三日目の晩の描写が、侯爵夫妻が幽霊の出る部屋に入るやいなや現在形になるときと同じ効果を生んでいるのである。

何か? とたずねた主人に対して、騎兵は「ブランデーを一杯ノ」と答え、「のどがかわいてるんだ」と続けるのだが、ここにすでにこの作品の大きな特徴の一つがあらわれてくる。すなわち、これらの言葉の間に、騎兵の動作が描かれるのである。それも indem に導かれる副文であらわされているのであるから、前後の言葉と同時に進行している動作と見なされるのである。

そして注目すべきは、この indem による同時進行動作の描写が計 8 回も、しかもすべて騎兵の動作をあらわすときにのみ使用されていることである。この indem の 8 個という数は、短い話である Anekdote の中にあって

は尋常ではない。前稿にあげたクライストの11編すべての Anekdote の中に indem は19個であるのに、この1編だけで8個なのだからである。次にこの indem を中心とした騎兵の動作の描写をみていくこととする。

- ① “ein Glas Brantewein !” antwortet er, **indem** er sein Schwert in die Scheide wirft : “mich dürstet.”
- ② “Ei, was !” spricht er, **indem** er dem Pferde den Zügel über den Hals legt. “Ich habe den ganzen Tag nichts genossen !”
- ③ “Ach, was !” spricht er, **indem** er die Flasche wegstößt, und sich den Hut abnimmt : “wo soll ich mit dem Quark hin?”
- ④ Und : “schenk er ein !” spricht er, **indem** er sich den Schweiß von der Stirn abtrocknet : “denn ich habe keine Zeit !”

これら始めの4個の indem は、騎兵が何か発言するたびに必ず挿入される動作表現として、これも必ず使用されている。しかしこのように indem が4回使われたあとでは違ってくる。残り4個の indem は必ずしも連続して出てくるわけではなく、間に他の接続詞による表現があったり、接続詞を使わずに騎兵の動作が描写される。それはどういうことを意味するのであろうか？ 馬で跳ばしてきた騎兵が、剣を鞘におさめ、馬の首に手綱を置き、（差し出された）ビンを押しかけて帽子を取り、額の汗をぬぐって、とにかく一杯目のブランデーを飲み終えるまで、彼は何らかの動作をしつつ発言している。すなわち、馬で跳ばしてきたその余韻がここまで残っていて、はずんでいた息と気持がここまできてやっと落ち着いた、と解釈できるのである。それゆえ騎兵が一杯目を飲み終り、「もう一杯！」と二杯目を要求するとき、同時進行する彼の動作は描かれないのだ。

i) “Noch eins !” spricht der Kerl ; während die Schüsse schon von allen Seiten ins Dorf prasseln.

ここでは四方八方から聞こえてくる銃声が描かれて、騎兵のふてぶてしさ、落ち着きが強調されているのみである。そして「もう一杯！」と再度言

うとき、彼はグラスを差し出す動作をするが、それは und で結ばれた主文で言い表わされる。

ii) “Noch eins!” spricht er, **und** streckt mir das Glas hin-

すなわち、発言したあとか、あるいは少なくとも同時ではない動作として描かれるのである。それからまた indem が使われる。

⑤ “Und gut gemessen”, spricht er, **indem** er sich den Bart wischt, und sich vom Pferde herab schneuzt: “denn es wird bar bezahlt!”

ここでの indem 文の使い方は前記③と同じもので、und で結合された二文から成っているのだが、二文とも spricht という主文の定動詞に関わってゆく同時進行の動作と考えない方が良いであろう。⑤において、「髭をぬぐい、馬の上から鼻をかみながら『なみなみとな』と言い、『～』」とするのではなく、むしろ「髭をぬぐいながら『なみなみとな』と言い、馬の上から鼻をかんで『～』」と解釈すべきである、ということである。それは単に、鼻をかみながら何か言うことはできない、というような理由からではなく、indem 文内の二文がコンマで分けられていることから説明しようと言えよう。すなわち、二文とも問題なく indem でくくられる同時進行動作の表現であるなら、このコンマは不要であろうからである。コンマひとつおろそかにしなかったクライストを考えると、この indem 内にあるコンマの意味は、微妙に二文を分けているのだと考えられる。これは同様に③においても妥当することである。

二杯目、三杯目を飲んだ騎兵は次のように言い、動作する。

iii) “Ach!” - schüttelt sich der Kerl.

iv) “Der Schnaps ist gut! - Na!” spricht er, **und** setzt sich den Hut auf: “was bin ich schuldig?”

iii, iv) は連続する文であるが、iii) においては、これまで使われていた spricht er も indem もない。前者のかわりにはグッシュュが、indem に導かれる副文で動作を示すかわりには、schüttelt sich der Kerl という主文が使

用されている。「ああ、！」という感嘆の声は、iv) の「このシュナップスはうまい、！」という言葉へ続くと考えられるが、三杯目を今まさに飲み終えた騎兵の感きわまった様子が、巧みに表現されている。これまで一度も使われなかったダッシュが、「身震いする」という動作が次に続くことによって、千言万語の重みをもつ間を表現しているといえよう。次の iv) の中のダッシュも同様の意味をもっている。

iv) の動作 **und setzt sich den Hut auf** も主語を直前の **er** とする主文であり、～“ **spricht er** との並列文である。しかしここでもコンマが挿入されていて、「このシュナップスはうまい、！——さて、！」と 言 っ て か ら、いわば落ちていて「そして帽子をかぶり」「いくらだい？」と続けるのである。シュナップスを三杯飲み、その味にも満足した騎兵の悠然たる様子が伺える。

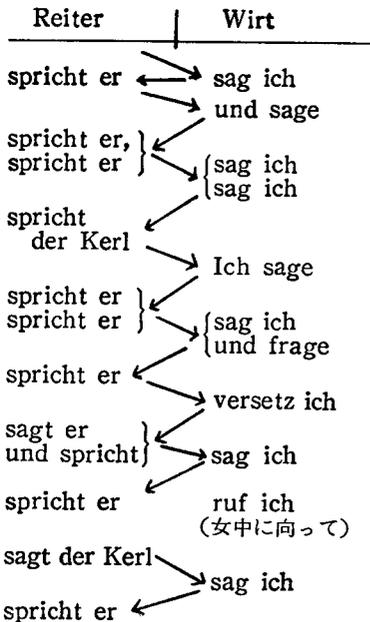
⑥ “Na !” sagt er, indem er in seinen Stiefel greift : “so solls ihm Gott lohnen”, und holt, aus dem Stiefel, einen Pfeifenstummel hervor, und spricht, nachdem er den Kopf ausgeblasen : “schaff er mir Feuer !”

次に騎兵が発言するこの部分でも **indem** が使用されているが、これはこれまでの通常の意味と用法によるものである。ここでは下線を引いたように騎兵の三つの動作が表現されているのだが、始めの **indem** による動作は、「言う」(sagt er) のと同時にされるものであり、次の **und** で結合される動作は、前の“so solls ihm Gott lohnen”という発言ののちに行われる。そしてその次に、**nachdem** に導かれる副文によって表現される動作があったあとで、“schaff er mir Feuer !” と言うわけであるが、ここでわざわざ **und spricht** と言葉をついでいる。他の個所では見られないことである。すなわち、“schaff er mir Feuer !” という命令文が小文字で始まっているのを見れば明らかのように、この文は前の文 “Na !” “so solls ihm Gott lohnen” と一諸に考えねばならない文であって、こういう場合、他では

“Na!” の次の sagt er 一つで済ませてしまっているからである。では何故この語が挿入されているのか？ 二つの理由をあげることができよう。

一つには、次の nachdem 副文による動作の描写があるためである。ここで und spricht を入れないと、動作の前後関係が成立しえなくなる。つまり、パイプを取り出す前にパイプの燃えさしを吹く、という関係になってしまうのである。反対に、もしこの動作を nachdem を用いず、すなわち主文で言いあらわすなら、und spricht は不要となろう。“～”, holt, aus dem Stiefel, einen Pfeifenstummel hervor, und bläst den Kopf aus: “schaff er mir Feuer!” とすれば良いからである。

もう一つの理由は、さらに次の文 Feuer! sag ich: との関係からであると考え。この Anekdote を読んで真先に気付くことは、騎兵と私 (=宿の主人) との発言を描写する際、前者には spricht er が、後者には sag ich が多用されていることである。二人のやり取りをその点にだけ絞って書き出してみると次の図のようになる。(矢印は発話の移動を示す)



このように spricht er と sag ich との対応が極めて顕著であることも大きな特徴の一つになっている点を考えあわせるとき、次に来る sag ich に対峙する関係としての spricht er が浮かびあがってくるように思えるのだ。

したがってこれらの理由から総合すると、確かに “schaff er mir Feuer!” は小文字で始まって前の文との連結を思わせるが、und spricht が挿入されることによって、むしろこの und の前で一度切れて、

次の「私」との対応が重視されているのだと言えるであろう。

さて次に騎兵が行う発言と動作はこういわれている。

v) “Feuer, ja !” spricht er : “denn ich will mir eine Pfeife Tabak anmachen.”

vi) “Na !” sagt der Kerl, die Pfeife, die er sich angeschmaucht, im Maul : “nun sollen doch die Franzosen die Schwerenot kriegen”

⑦ Und damit, indem er sich den Hut in die Augen drückt, und zum Zügel greift, wendet er das Pferd und zieht von Leder.

v) では i) と同様、動作は描かれていないし、vi) では全く別な形で描かれている。vi) の下線部分は文の形を成していないばかりか、文法的にはどこにかかっていくのか不明と言わざるを得ない。ちょうど「ロカルノの乞食女」論の中で E. シュタイガーが問題にした *zwei Lichter auf dem Tisch* という句と同様のものである。⁵⁾ シュタイガーの言を借りれば、この下線部分は戯曲作品におけるト書きに相当する、ということになる。いずれにせよ、騎兵の動作、様子とおぼしき叙述が、ここではそのような形であらわされていることに注目せねばならない。

すなわち、「ロカルノの乞食女」での先の句が、緊張のうちに始まりついには破局を迎えるに至る三日目の夜、件の部屋に侯爵夫妻が入った途端に使われる表現であるのと同じように、ここの句も、主人の心配をよそに悠然と酒を飲み、タバコをふかした騎兵が、いよいよフランス兵との戦いに腰を上げる意志を述べるときに使用されていることを見過してはならないであろう。こうして巧みに緊張が演出されていくのである。

これに続くのが⑦の文であるが、ここでは騎兵の発言はなく、動作のみが描写されている。主文は *Und damit wendet er* ~ となるわけであるから、「さて、フランス人どもをやっつけてやるかノ」と言いながら (*damit*)、「彼は馬の向きを変え」るのだが、その前に彼は「帽子をかぶり、手綱を引いて(下線部分)」いるはずである。つまり、*indem* 文は厳密に言うなら、

馬の向きを変えるのと同時に進行する動作をあらわしているのではなく、それ以前に行なわれる動作のはずである。しかし、だからと言って *indem* のかわりに *nachdem* を用いたとしたら、どうであろうか。「帽子を真深にかぶり、手綱を引いてから、彼は馬の向きを変え……」というようなニュアンスが出てきて、時間的前後関係は明確になっても、整然としすぎてしまい、騎兵の動作がここに至ってもまだ悠然と、否、かえって悠長なものになってしまうであろう。瞬時に機敏に行われた動作として表現するに、この *indem* のもつ意味は大きいと言わざるを得ない。ということは逆に、ここに至って *indem* 文のもつ同時進行的意味合いは薄れてきている、ということをも意味するのである。

さて最後の *indem* は次のように書かれている。

- ⑧ “*Ei was!*” spricht er, **indem** er ausspuckt; und faßt die drei Kerls blitzend ins Auge. “Wenn ihrer zehen wären, ich fürcht mich nicht.”

やはりこの *indem* も「～しながら」という同時進行では不自然である。「唾を吐きながら」言うことになってしまうからだ。⑦の場合と同様に、もちろんほとんど同時と言って良いであろうし、そう解釈せねばならないが、ここでは前のように「言う」直後の動作と見るべきであろう。そうして次に、セミコロンの分かれ *und* で結ばれた主文で、いわば強調された形をとって、行動を起す直前の動作が描写されるのである。

このように主人と騎兵とのディアログの中にあらわれた騎兵の言葉とその動作との関係のみをみると、始めそれらは同時に行なわれて、騎兵は村に入ってくるまでの余韻を残しているが、次第に *indem* のみではなく、*und* で結合された主文等も動作を表現するのに使われるようになって、彼の落ち着きぶりが描写される。そして最後には、単なる句で表現されたり、*indem* を用いても始めの方の使い方とはかなり違ったものになるに及んで、騎兵の戦いに臨む直前の機敏な様子が伝わってくる、というような関係になってい

るのがわかるのである。

次にこのディアローグ部分において看過できないのは、主人と騎兵との好対照的な態度の違いである。騎兵はこれまで見てきたように、敵兵が村に入ってくるその時まで悠然と酒を飲み、パイプをふかしているが、主人は騎兵の身を案じて終始落ち着いていない。相手が落ち着けば落ち着くほど、彼は苛立ち、あきれを。それは彼の言葉をみれば明白である。騎兵が何か言うたびに、彼は驚きの言葉を発している。そしてディアローグの中に出てくるこれらの感嘆の言葉は各々一文か二文であるのに、騎兵が馬の向きをフランス兵たちの方へ変え、剣を引き抜くと、主人は次のように多弁になる。

Ein Mordkerl! sag ich; ein verfluchter, verwetterter Galgenstrick! Will er sich ins Henkers Namen scheren, wo er hingehört? Drei Chasseurs - sieht er nicht? halten ja schon vor dem Tor?

ここには、この騎兵は逃げずに本当に一人で敵に立ち向かうつもりなのか？気が狂ってるのではないのか？正気の沙汰じゃない／＼という主人の頂点に達した興奮ぶりが、これまでになく感嘆文や語を重ねることで表現されている。

このような対比の面白さは、両者の言葉のやり取り自体にももちろん出ている。たとえば、騎兵が二杯目の酒を要求するとき、タバコにつける火を欲しがるときとは、次のように言われている。

- “Noch eins!” spricht der Kerl; ~. Ich sage: noch eins? Plagt ihn -! “Noch eins!” spricht er, und~
- “schaff er mir Feuer!” Feuer? sag ich: plagt ihn -? “Feuer, ja!” spricht er: ~

この Noch eins! — noch eins? — Noch eins! と、 Feuer! — Feuer? — Feuer, ja! という語呂の良いやり取りの中にも、二人の対照

的な姿が良くあらわされていることがわかるのである。

B) 主人の話す騎兵の戦いぶり

“Bassa Manelka!” ruft der Kerl, ~から “hoho! hoho! hoho!” -- までの部分で、これも主人が騎兵の戦いの様子を述べるという形をとっている。この部分に Punkt は一つもなく、全体で一文の形式を成しているが、1.の前置き部分の長文とは違って、短文が並列されている。また、コンマ等句読点も多く、1.の倍以上も使用されているのである。このことは何を意味するのか？それは今までみてきたように、内容と大いに関係のあるところである。つまり、それだけ話し手である主人の興奮を示しているのであり、同時に戦いそのもののテンポの早さや、逆に停滞をもあらわしているに他ならない。

この部分はまた、dergestalt, daß によって二文されるという面ももっている。その前半で騎兵の勇敢さを概略的に述べ、後半でそれを具体的に描写するのである。前半部分のみをみることから始めよう。

“Bassa Manelka!” ruft der Kerl, und gibt seinem Pferde die Sporen und sprengt auf sie ein; sprengt, so wahr Gott lebt, auf sie ein, und greift sie, als ob er das ganze Hohenlohische Korps hinter sich hätte, an; dergestalt, daß, ~

この前半では、騎兵が “Bassa Manelka!” と叫んで馬に拍車を入れ、敵兵に襲いかかっていく、ということしか言われていない。しかしその表現の仕方には興味深いものがある。上記下線部①は so wahr Gott lebt を挿入し、①の sprengt auf sie ein をくりかえすことで、①を強調する。②すなわち dergestalt, daß 以降の後半すべては、②を敷衍している、つまり②の「彼らに襲いかかる」行為を②はくわしく述べる形をとっているのである。①を受けて②が、②を受けて③が、というようにテンポ良く話が進行していくのだ。

ところが dergestalt, daß を境にして、そのテンポは乱れ、時として滞るような印象さえも受ける。句読点の数も前半にくらべさらに多くなる。

dergestalt, daß, da die Chasseurs, ungewiß, ob nicht noch mehr Deutsche im Dorf sein mögen, einen Augenblick, wider ihre Gewohnheit, stutzen, er, mein Seel, ehe man noch eine Hand umkehrt, alle drei vom Sattel haut, die Pferde, die auf dem Platz herumlaufen, aufgreift, damit bei mir vorbeisprengt, und : “Bassa Teremtetem!” ruft, und : “Sieht er wohl, Herr Wirt?” und “Adies!” und “auf Wiedersehn!” und : “hoho! hoho! hoho!” --

dergestalt, daß に続いて da に導かれる副文が出てき、その中に ob に導かれる副文が入るといふ箱入り文が再び使用される。しかもこの箱入り文が終るまでに、最低 3 個のコンマで足りるところを、倍以上の 7 個用いている。フランス兵が stutzen する (はっとして立ち止まる) と書いてあるが、まさにこの表現それ自体も stutzen しているのである。

この副文が終ってやっと主語 er が出てくるが、目的語、定動詞の前に、同格語、副文が挿入される。そして第二の目的語 (die Pferde) には関係文がついて定動詞 (aufgreift) と引き離される。このようにまさにコマ切れの文章構成となっている。そうして三人の敵を倒す場面が詳細に述べられるかという、そうではない。ここに言われているように、あっという間に (ehe man noch eine Hand umkehrt) 三人とも倒してしまうのである。すなわち、叙述自体も実にあっさりとしたものでしかない。換言するなら、これまで騎兵の落ち着きぶりを綿綿と綴ってきたあとにしては、肝心の戦闘場面の描写が簡単すぎるという印象を受けるのだが、それは戦闘それ自体が簡単に終ってしまったのだ、ということの意味しているに他ならないのである。

さて、敵を倒し、彼等の馬を連れて主人の前を走り去る場面になると、テンポは再びスムーズになる。

“Bassa Teremtetem!” ruft, und : “Sieht er wohl, Herr Wirt?”
und “Adies!” und “auf Wiedersehn!” und : “hoho! hoho! hoho!”

これだけのことを疾駆しながら言うわけだが、よく見るとこれらは三つに分けられるようになっている。つまり、コロンの個所で分けると、先ず勝鬨の声ともいうべき “Bassa Teremtetem!” をあげ、次に主人の前に来たのであろう、主人に向っての言葉 “Sieht er wohl, Herr Wirt?” “Adies!” “auf Wiedersehn!” を言い、最後に “hoho! hoho! hoho!” と馬を駆り立て遠ざかっていく、というように書かれているのである。このコロンの適確さと、これらの言葉がすべて und で結ばれていることからくる軽快なテンポの良さは比類ない。まさに騎兵が疾走して前を過ぎ、遠ざかってゆく時の馬の早い足並みのテンポを、この場面の叙述形式自体がもっているのだ。

C) 主人の話の結び

こゝは So einen Kerl, sprach der Wirt, habe ich zeit meines Lebens nicht gesehen. という単文だけで、この Anekdate の最後の文でもある。「あんな奴を生れてこの方見たことがない」と言うとき、時称は経験を示す現在完了に、すなわち主人の話の冒頭で使われていた時称（過去）と同類のものに戻り、主人の高ぶっていた気持が元に戻ったこと、あるいは戻りつつあることをあらわしている。

それとともにここで指摘しておかねばならないのは、中に挿入されている sprach der Wirt である。これは先に、A) において留保しておいた語句と同じものである。つまりこの語句は、二度使われているのである。前述したように、先のこの語句が主人の話の始まりを示すごとく、ここでのそれは彼の話の終りを告げている。いわばそれらは、主人の長い話の始めと終りを明示する「引用符」とも言うべき役割を果たしていると言えよう。

さらに、この sprach der Wirt は、作者を再登場させる役割も果たしている。この Anekdote において、終始主人の代弁者的立場しかとっていない

い作者であるが、ここで再び登場することの意味は大きい。前置き部分に当初から書かれているように、この話は主人から聞いた話なのであって、決して筆者の作り話ではないことを、最後にもう一度くりかえすことになるのである。それによって話全体に真実性を増す結果にもなっていると言えよう。ということはつまり、この sprach der Wirt は単に引用符的役割に終わっているのではなく、同時にこの結び部分と前置き部分とを関連づけ、全体が円環を成すような形式になっていることを意味しよう。そうしてまとまりのある Anekdote になっているのである。

使用テキスト

Heinrich von Kleist, Sämtliche Werke und Briefe. Herausgegeben von Helmut Sembdner 2. Bd. (Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt 1970)

注

- 1) Die Berliner Abendblätter Heinrich von Kleist's, ihre Quellen und ihre Redaktion, H. Sembdner (Schriften der Kleist-Gesellschaft Bd. 19 Unveränderter Nachdruck. Amsterdam/John Benjamins 1970) S. 89-90
- 2) 前稿にも引用したリヒノフスキー宛書簡の中に「(鼓手は)私の深奥の感情によれば、イエーナ近郊で生じたことと比較しても……」という記述があり、この Anekdote の話のことに触れていると推測されるのだが、これとても原典深索の手がかりにはならない。
- 3) 4) とともに軽騎兵の伝統となっているハンガリー語の雄哮で、前者が関の声、後者が勝鬨の声に相当すると思われる。ドイツ人にも耳新しい響きがあるらしく、作家の M. シュターデがそのようなことを “Sonderbare Wirkungen einer Kleistschen Anekdote” に書いている。(S. 369-373 In : Schriftsteller über Kleist. Eine Dokumentation herausgegeben von Peter Goldammer. Aufbau-Verlag Berlin und Weimar 1976)
- 5) Emil Staiger : Heinrich von Kleist “Das Bettelweib von Locarno”. Zum Problem des dramatischen Stils. 87-100. In : Interpretationen 4. Deutsche Erzählungen von Wieland bis Kafka, Hrsg. von Jost Schillemeit. Fischer Bücherei 1966, S. 91.